

〔研究ノート〕

幼児の身体的表現を育む保育者の役割

—幼稚園教育要領の領域「表現」の分析—

中 根 佳 江
Yoshie Nakane

大阪総合保育大学
児童保育学部 非常勤講師

瀧 川 光 治
Koji Takigawa

大阪総合保育大学
児童保育学部 教授

本研究においては、幼稚園等で取り組まれている身体的表現を「幼稚園教育要領」領域「表現」のねらい・内容等に関連付けて論考を行い、幼児の身体的表現を育む保育者の役割について明らかにすることを試みた。その結果、幼児の身体的表現は様々な体験を通して、感じたこと、考えたことを内面的なイメージを身体で表現することがあるが、その身体的表現を育むためには保育者が幼児の身体的表現を受け入れることが大切である。そして保育者の捉え方によって、幼児の身体的表現に影響があることが明らかになった。

「幼稚園教育要領」の領域「表現」には、「身体的表現」もしくは「身体表現」という文言は直接的には含まれていない。「自分なりに表現」「様々な表現」という文言の中には、身体的表現（リトミックやダンス・身振り表現等）の中での幼児なりの表現の仕方や様々な表現の仕方とも含まれると考え、「幼稚園教育要領」から幼児の身体的表現について分析すると、幼児の本能のままの表現から、内面に蓄積されたイメージを考慮して身体的表現を大切にすることが、幼児の豊かな感性に繋がり、豊かな表現に繋がるものと考えられる。

また保育者が幼児の身体的表現を受け止めることによって、幼児は身体的表現を楽しみ、身体的表現をしようとするようになる。保育者の受け止め方によって、幼児の身体的表現に影響があることが明らかになった。

キーワード：保育者・身体的表現・幼児・「幼稚園教育要領」・領域「表現」

I. はじめに

本研究は、幼児の身体的表現を育む保育者の役割について、「幼稚園教育要領」の領域「表現」の分析を踏まえて論考するものである。ここでいう「身体的表現」とは、リトミック^{注1)}やダンス・身振り表現等を総称したものであり、幼稚園や保育所、認定こども園等（以下、「幼稚園等」と略す）で取り入れられていることが多い活動である。そこで、本研究は、幼児の身体的表現を育む保育者の役割について、「幼稚園教育要領」の領域「表現」の分析を踏まえて論考するものである。

本研究では幼稚園等の日々の保育の中で取り組まれている身体的表現に着目するので、「保育者の役割」や「ねらい」「内容」と身体的表現を結び付けて捉えなおす必要がある。幼稚園等における日々の保育においては、それぞれの園の創意工夫によって、幼児の表現や表現しようとする意欲等を育んでいる。その際、どのように育んでいくかを考えて行くときに大本になるのは、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」であり、「幼稚園教育要領」は、教育基本法に定める教育の目的や目標の達成のため、学校教育法に基づき国が定める教育課程の基準と定められている。

そこで、本研究においては、幼稚園等で取り組まれている身体的表現を領域「表現」のねらい・内容等に関連付けて論考を行い、幼児の身体的表現を育む保育者の役割について明らかにすることを目的としている。

「幼稚園教育要領」は平成29年に改訂告示されているが、領域「表現」は平成元年の改訂によって示された時点にさかのぼることができる。平成元年以前のものであるが、保育内容の領域として「健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作」として6領域が示されていた。平成元年の改訂によって、5領域「健康・人間関係・環境・言葉・表現」に変更された。それによって領域「表現」は、単純に「音楽リズム」と「絵画製作」を合わせたものではなく、感性と表現に関する領域として、感じたことや考えたことを自分なりに表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点として示されている。それ以降、平成10年、平成20年、平成29年と改訂されているが、領域「表現」に示されているねらい・内容等については大幅な変更はなく、基本的な事柄は平成元年のものが引き継がれている。

「幼稚園教育要領」の中の領域「表現」についての変遷についての研究は、山内¹⁾や倉原²⁾のものがあるが、それらは身体的表現に特化して分析したものではないので、本研究では身体的表現に着目してその変遷をおさえ

ることとする。

II. 「幼稚園教育要領」の領域「表現」の「ねらい」「内容」「内容の取扱い」について

ここでは、まず平成元年以降の領域「表現」の「ねらい」「内容」「内容の取扱い」の変遷についての概略を整理した上で、その中に含まれると考えられる「身体的表現」に関する項目を抽出する。また、それらに関して「幼稚園教育要領解説」を用いて考察を行う。

1. 平成元年以降の領域「表現」の「ねらい」「内容」「内容の取扱い」の変遷（概略）

「幼稚園教育要領」において各領域は、「ねらい」「内容」「内容の取扱い」で構成されている（平成元年は「内容の取扱い」ではなく「留意事項」）。そこで、領域「表現」の全体像を把握するために、それらすべてをいったん表1-1から表1-4に整理し、次項以降で、身体的表現の視点から考察を深める。なお、以下に出てくる下線は変更部分や付け加わったところを示すために筆者が引いたものである。

表1-1を見ると「観点」は、平成10年以降は同じ文言で記述されており、平成元年のみが書き方の違いがみられる。また、育てたいこととして示されていることは平成元年は、「豊かな感性」「表現する意欲」「創

造性を豊かにする」という3つであり、平成10年以降は「豊かな感性」「表現する力」「創造性を豊かにする」という3つである。さらに、それらを育てるために平成10年以降では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して」というように「自分なりに表現する」という文言が含まれている。

表1-2を見ると「ねらい」は、平成10年以降は同じ文言で記述されており、平成元年の(2)のみに違いがみられる。(1)は「豊かな感性」に関わるねらい、平成元年の(2)は「様々な方法で表現しようとする」という「表現する意欲」に関わるねらい、平成10年以降の(2)は、「自分なりに表現して楽しむ」というように「自分なりの表現を楽しむ」ことに関するねらい、(3)は「イメージの豊かさと様々な表現」の相互関係の視点からのねらいである。

表1-3を見ると「内容」はいずれも8項目で示されており、いずれもほぼ同じように記述されているが、下線を引いた個所のように少し違いがみられる。平成20年以降は、「など」という文言が付加されているように、それぞれに幅を持たせ多様な内容を含めていると思われる。また、平成29年(1)では「音、色、形・・・」という並び順が「音、形、色・・・」と変更され、平成20年以降の(1)では文末に「感じたりするなどして楽しむ」と感性に関わることが示されている。

表1-4を見ると「留意事項（平成元年）」「内容の

表1-1 領域「表現」の「観点」

平成元年 ³⁾	平成10年 ⁴⁾	平成20年 ⁵⁾	平成29年 ⁶⁾
この領域は、豊かな感性を育て、感じたことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点から示したものである。	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、 <u>豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。</u>	平成10年と同じ	平成10年と同じ

表1-2 領域「表現」の「ねらい」

平成元年 ⁷⁾	平成10年 ⁸⁾	平成20年 ⁹⁾	平成29年 ¹⁰⁾
(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。	(1) 平成元年と同じ	(1) 平成元年と同じ	(1) 平成元年と同じ
(2) 感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする。	(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。	(2) 平成10年と同じ	(2) 平成10年と同じ
(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。	(3) 平成元年と同じ	(3) 平成元年と同じ	(3) 平成元年と同じ

取扱い（平成10年以降）」はいずれも3項目で示されており、(1)が「豊かな感性」、(2)が「自己表現」、(3)が「表現の過程を楽しむ」という視点で記述されている。とくに平成10年以降では(3)において「他

の幼児の表現に触れられるよう配慮し」とあるように、表現していく過程で一人ひとりの自己表現を楽しむ視点だけではなく、他者との関わりの中での表現の視点が提示されている。

表1-3 領域「表現」の「内容」

平成元年 ¹¹⁾	平成10年 ¹²⁾	平成20年 ¹³⁾	平成29年 ¹⁴⁾
(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり楽しんだりする。	(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、 <u>楽し</u> んだりする。	(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、 <u>感じた</u> りするなどして楽しむ。	(1) 生活の中で様々な音、 <u>形</u> 、色、手触り、動きなどに気付いたり、 <u>感じた</u> りするなどして楽しむ。
(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。	(2) 平成元年と同じ	(2) 平成元年と同じ	(2) 平成元年と同じ
(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。	(3) 平成元年と同じ	(3) 平成元年と同じ	(3) 平成元年と同じ
(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり自由にかいたりつくったりする。	(4) 平成元年と同じ	(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったり <u>など</u> する。	(4) 平成20年と同じ
(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。	(5) 平成元年と同じ	(5) 平成元年と同じ	(5) 平成元年と同じ
(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。	(6) 平成元年と同じ	(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったり <u>など</u> する楽しさを味わう。	(6) 平成20年と同じ
(7) かいたりつくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり飾ったりする。	(7) 平成元年と同じ	(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったり <u>な</u> どする。	(7) 平成20年と同じ
(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現し、演じて遊ぶ楽しさを味わう。	(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。	(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする <u>など</u> の楽しさを味わう。	(8) 平成20年と同じ

表1-4 領域「表現」の「留意事項（平成元年）」「内容の取扱い（平成10年以降）」

平成元年 ¹⁵⁾	平成10年 ¹⁶⁾	平成20年 ¹⁷⁾	平成29年 ¹⁸⁾
(1) 豊かな感性は、日常生活の中で美しいもの、優れたもの、心に残るような出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し様々に表現することなどを通して養われるようにすること。	(1) 豊かな感性は、 <u>自然な</u> <u>どの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、</u> <u>優れたもの、</u> <u>心を動かす</u> <u>出来事などに会い、</u> <u>そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、</u> <u>様々に表現することなどを通して養われるようにすること。</u>	(1) 平成10年と同じ	(1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。 <u>その際、</u> <u>風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など</u> <u>自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。</u>
(2) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ表現する意欲を十分に発揮させることができるような材料や用具などを適切に整えること。	(2) <u>幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、</u> <u>教師はそのような表現を受容し、</u> <u>幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、</u> <u>幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。</u>	(2) 平成10年と同じ	(2) 平成10年と同じ
(3) 幼児が自分の気持ちや考えを素朴に表現することを大切にし、生活と遊離した特定の技能を身に付けさせるための偏った指導を行うことのないようにすること。	(3) <u>生活経験や発達に応じ、</u> <u>自ら様々な表現を楽しみ、</u> <u>表現する意欲を十分に発揮させることができるような遊具や用具などを整え、</u> <u>自己表現を楽しめるように工夫すること。</u>	(3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、 <u>他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、</u> <u>表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること。</u>	(3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、 <u>様々な素材や表現の仕方に親しんだり、</u> <u>他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、</u> <u>表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること。</u>

2. 「幼稚園教育要領」の中の「身体的表現」について

(1) 領域「表現」の中の「身体的表現」について

表1-1から表1-4に見るように領域「表現」の「ねらい」「内容」「内容の取扱い」には、「身体的表現」もしくは「身体表現」という文言は直接的には含まれていない。しかしながら、「自分なりに表現」「様々な表現」という文言の中には、身体的表現（リトミックやダンス・身振り表現等）の中での幼児なりの表現の仕方や

様々な表現の仕方も含まれると思われる。そのため、ここでは「ねらい」「内容」「留意事項（平成元年）」「内容の取扱い（平成29年）」の中で「身体的表現」が含まれると思われるものを抽出し、表2に整理する。なお、抽出するにあたり、平成元年と平成29年のものについて抽出する（平成10年、平成20年、平成29年はほぼ類似しているため、最新のもので記述する）。

平成元年及び平成29年の「ねらい」（1）では「豊か

表2 「ねらい」「内容」の中で身体的表現に関する推察されるもの

	平成元年 ¹⁹⁾	平成29年 ²⁰⁾
ねらい	(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。 (2) 感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする。 (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。	(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。
内容	(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり楽しんだりする。 (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり自由にかいたりつくったりする。 (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現し、演じて遊ぶ楽しさを味わう。	(1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。 (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。
留意事項 (平成元年) 内容の取扱い (平成29年)	(1) 豊かな感性は、日常生活の中で美しいもの、優れたもの、心に残るような出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し様々に表現することなどを通して養われるようにすること。 (2) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しむ表現する意欲を十分に発揮させることができるような材料や用具などを適切に整えること。 (3) 幼児が自分の気持ちや考えを素朴に表現することを大切に、生活と遊離した特定の技能を身に付けさせるための偏った指導を行うことのないようにすること。	(1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。 (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。 (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しむ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

な感性」の中にイメージを持つという身体的表現の始まりが含まれていると考える。

平成元年の「ねらい」(2)では「様々な方法」の中に身体的表現も含まれていると考えられる。平成29年の「ねらい」(2)では「自分なりに表現して楽しむ」の中に身体的表現も含まれていると考えられる。

平成元年及び平成29年の「ねらい」(3)では「様々な表現を楽しむ」となっているが、そこに身体的表現も含まれていると考えられる。

平成元年及び平成29年の「内容」(1)では、「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり楽しんだりする。」「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」という文章の中で、五感を通して感じる事が身体で表現するための、準備段階と捉えることがあると考えられる。感じる事によって、イメージを持つことが出来、身体的表現に繋がると捉えられる。

平成元年及び平成29年の「内容」(2)では、「イ

メージを豊かにする。」という中に、「内容」(1) 同様に、イメージを豊かにして、身体的表現に繋がると考えられる。

平成元年及び平成 29 年の「内容」(4) では「音や動きなどで表現したり」の中に身体的表現も含まれていると考えられる。また、しっかりとした身体的表現ではなく、感じたことや考えたことなどを、言葉ではなく自分の思いを身体で表現すると言う動きにも捉えられることはあるとも考えられる。

平成元年及び平成 29 年の「内容」(8) では「動きや言葉などで表現し」「動きや言葉などで表現したり」の中に身体的表現も含まれていると考えられる。また、「動きや言葉」などとすることによって、(4) の「動きなどで表現」よりは、しっかりと身体的表現と解釈することが出来る。

「留意事項(平成元年)」「内容の取扱い(平成 10 年以降)」については、平成元年及び平成 29 年(1) では、「豊かな感性は、日常生活の中で美しいもの、優れたもの、心に残るような出来事などに会い」「豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い」という中に、日常生活や身近な環境の中で心を動かすようなことに出会うことによって豊かな感性が培われて、その感性から、身体的表現に繋がると考えることが出来る。また、「様々な表現する」というところから、身体的表現も含まれると考える。

平成元年及び平成 29 年(2)「自ら様々な表現を楽しむ表現する」「幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにする」と言う中に身体的表現も含まれると捉えられる。

平成元年及び平成 29 年の(3)において「幼児が自分の気持ちや考えを素朴に表現することを大切に」「様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫する」という中に身体的表現も含まれていると考えられる。

(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中の「豊かな感性と表現」

平成 29 年の「幼稚園教育要領」の改訂によって、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、その中に「豊かな感性と表現」という項目が含まれている。

「豊かな感性と表現」は「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現す

る喜びを味わい、意欲をもつようになる」という幼児の育ちを示したものであるが、表 2 で示したねらい・内容・内容の取扱いを幼児期の終わりという視点で整理されたものであるため、身体的表現も含まれていると考えられる。

3.「幼稚園教育要領解説」を踏まえて

表 2 に整理したように、領域「表現」の「ねらい」「内容」「内容の取扱い」に身体的表現として読み取れる部分があることが見出されたので、ここではさらに「幼稚園教育要領解説」(文部科学省、平成 30 年)を用いて論考を進める。

(1)「ねらい」の解説から

ねらい「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ」「(2) 感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする」「(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」について解説文には次のように示されている²¹⁾。

「幼児は、毎日の生活の中で、身近な周囲の環境と関わりながら、そこに限りない不思議さや面白さなどを見付け、美しさや優しさなどを感じ、心を動かしている。そのような心の動きを自分の声や体の動きあるいは素材となるものなどを仲立ちにして表現する」「幼児は音楽を聴いたり、絵本を見たり、つくったり、かいたり、歌ったり、音楽や言葉などに合わせて身体を動かしたり、何かになったつもりになったりなどして、楽しんだりする。これらの表現する活動の中で、幼児は内面に蓄えられた様々な事象や情景を思い浮かべ、それらを新しく組み立てながら、想像の世界を楽しんでいる。」

このことから、自分の内面に蓄えられた物を媒体として、幼児がイメージしたことを、身体で表現を楽しむことが出来ることと記載されている。また、体の動きを使って自分の意思表示を行うことがメインになり、身体的表現の入り口にいるような幼児を対象に記載されている。

(2)「内容」の解説から

内容(1)の解説文²²⁾では、「幼児は、生活の中で、例えば、身近な人の声や語りかけるような調子の短い歌、園庭の草花の形や色、面白い形の遊具、あるいは心地よい手触りのものなど、様々なものに心を留め、それに触れることの喜びや快感を全身で表す」と記載されている。

内容(2)の解説文²³⁾では、「幼児が出会う美しい物や心を動かす出来事には、完成された特別なものだけ

ではなく、生活の中で出会う様々なものがある。例えば、園庭の草花や動いている虫を見る、飼っている動物の生命の誕生や終わりに遭遇することなどである。それらとの出会いから、喜び、驚き、悲しみ、怒り、恐れなどと言った情動が生じ、心が揺さぶられ、何かを感じ取り、幼児なりのイメージを持つことになる。」「幼児の心の中への豊かなイメージの蓄積は、それらが組み合わせられて、やがてはいろいろな物を思い浮かべる想像力となり、新しいものをつくり出す力へと繋がっていくのである。」と記載されている。

内容(4)の解説文²⁴⁾では、「幼児は、感じたり、考えたりしたことをそのまま率直に表現することが多い。また、幼児は、感じたり、考えたりしたことを身振りや動作、顔の表情や声など自分の身体そのものの動きに託したり、音や形、色などを仲立ちにしたりするなどして、自分なりの方法で表現している。」「幼児は、自分なりの表現が他から受け止められる体験を繰り返す中で、安心感や表現の喜びを感じる。これらを基盤として、幼児の思いを音や声、身体の動き、形や色などに託して日常的な行為として自由に表現できるようにすることが大切である。幼児は、様々な場面でこのような表現する楽しみを十分に味わうことにより、やがて、より分化した表現活動に取り組むようになる。」と記載されている。

これもまた平成20年度と変更がなく、(1)(2)(4)の内容では、ねらいの(2)のようにまだ、自分のイメージを身体的表現でしっかりと表現できるところまで書かれていないが、この経験が今後より分化した表現活動に取り組むようになると記載されているので、身体的表現の入り口に当たる。

また、「表現は、言葉、身体による演技、造形などに分化した単独の方法でなされるというより、例えば、絵を描きながらその内容に関連したイメージを言葉や動作で表現するなど、それらを取り混ぜた未分化な方法でなされることが多い。」と記載されている。

この文章では、幼児がイメージしたことを身体的表現として表現していることを明記している。ただし、まだ未分化な方法とのことで、いろいろな表現の中に身体的表現が混じっていると考えている。

内容(8)の解説文²⁵⁾においては「生活の中で様々な体験を通して、心の中にその幼児が思い描くような像としてイメージを蓄積していく。そしてイメージはさまざまな刺激によってよびおこされ、表現していく」と記載している。解説文においては動きや身体という記載は無いが、身体的表現では内面のイメージを身体で表現するので、幼児がイメージを蓄積し、そのイメージを動きで表現するというところで身体的表現にも値する。

(3)「内容の取扱い」の解説から

内容の取扱いの(1)の解説文²⁶⁾では、「幼児の豊かな感性は、幼児が身近な環境と十分にに関わり、そこで心を揺さぶられ、何かを感じ、考えさせられるようなものに出会って、感動を得て、その感動を友達や教師と共有し、感じたことを様々なに表現することによって一層磨かれていく。」「幼児は、あるものに出会い、心が揺さぶられて感動すると、感じていることをそのまま表そうとする。その表れを教師が受け止め、認めることによって、幼児は自分の感動の意味を明確にすることが出来る。」と記載している。解説文においては動きや身体という記載は無いが、幼児が感じたこと、を様々なに表現することは身体的表現にも値する。幼児が感動したことを友達と教師と共有することが、豊かな身体的表現につながるので、教師が受け止め、認めることが大切であると考ええる。

(2)の解説文²⁷⁾では、「幼児の表現は、率直であり、直接的である。大人が考えるような形式を整えた表現にはならない場合や表現される内容が明快でない場合も多いが、教師は、そのような表現を幼児らしい表現として受け止めることが大切である。はっきりとした表現としては受け止められない幼児の言葉や行為でさえも、教師はそれを表現として受け止め共感することにより、幼児は様々な表現を楽しむことが出来るようになっていく。」「幼児は、自分の素朴な表現が教師や他の幼児などから受け止められる体験の中で、表現する喜びを感じ、表現への意欲を高めていく。その際、幼児が自分の気持ちや考えを素朴に表現することを大切にするためには、特定の表現活動のための技能を身に付けさせるための偏った指導が行われることのないように配慮する必要がある。」と記載している。幼児の表現は、大人の考えるような表現にはならない場合や、明快でない場合もあるが、身体的表現も同様に捉えられる。教師が、その幼児の身体的表現を受け止めることによって、幼児は身体的表現を楽しみ、身体的表現をしようとするようになる。また幼児の自由な表現を尊重し、教師の指導により、幼児の自由な表現を妨げないようにすることが大切であり、教師の受け止め方によって、幼児の身体的表現に影響があることが考えられる。

(3)の解説文²⁸⁾では、「幼児は、生活の中で感じたことや考えたことを様々なに表現しようとする。その姿は、その幼児がこれまでの過程や幼稚園の生活の中で体験したことを再現して楽しんだり、友達や教師に伝えようとしたり、さらに、工夫を重ねてイメージを広げたりするもので、その幼児の生活経験によって様々である」 「幼児が心に感じていることは、それを表現する姿を通

して他の幼児にも伝わり、他の幼児の心に響き、幼児同士の中で広がっていく。このように、幼児同士の表現が影響し合い、幼児の表現は一層豊かなものとなっていく。教師は、幼児がお互いの活動を見たり聞いたりして相手の表現を感じとれるように、場やものの配置に配慮したり、教師も一緒にやってみたりして、相互に響き合う環境を工夫することが大切である。」「幼児は、遊具や用具に関わったり、他の幼児の表現などに触れて、心を動かされ、その感動を表現するようになる。教師は、幼児が表現する過程を楽しみ、それを重ねていき、その幼児なりの自己表現が豊かになっていくように、幼児の心に寄り添いながら適切な援助することが大切である」と記載している。幼児の表現は、日常生活の中で体験したりしたことが蓄積し、イメージすることが出来、様々な表現をする。その様々な表現の中には、イメージしたことを身体で表現することも含まれると捉えられる。その身体的表現を広げるには、教師が表現する環境を工夫し、教師も一緒に身体的表現を楽しむことが大切であり、幼児の自発な表現を受け止め、その表現の過程に寄り添うことが、幼児の身体的表現を豊かにすると考えられる。

(4)「豊かな感性と表現」(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿)の解説から

解説文²⁹⁾では「幼児は、生活の中で心を動かす出来事に触れ、みずみずしい感性を基に、思いを巡らせ、様々な表現を楽しむようになる。幼児の素朴な表現は、自分の気持ちがあるまま声や表情、身体の動きになって表れることがある。また、教師や他の幼児に受け止められることを通して、動きや音などで表現したり、演じて遊んだりしながら、自分なりに表現することの喜びを味わう。」「幼児期の経験は、小学校の学習において感性を働かせ、表現することを楽しむ姿につながる。これらは、音楽や造形、身体等による表現の基礎となる。」と記載されている。

この部分は、幼児期の終わりまでに、感じたことやイメージしたことを身体的表現として、表現することを楽しみ、表現することの喜びを味わうようになることが、小学校の学習につながることで明記されている。

4.「幼稚園教育要領」における身体的表現に関する記載に関する考察

前述のように「幼稚園教育要領」における身体的表現の関連する記載事項によると、基本的な考えは変わっていないが、どのように身体的表現を高めていくかと言うようなプロセスを重視するようになってきているよう

に捉えられる。平成元年に「表現」に変更された時は、「音楽リズム」「絵画制作」を合わせただけではなく、幼児の幅広い表現を全て含めると位置づけられているが、表現の幅は広がったが、表現の深さを感じられるものではなかった。

平成30年までの変遷の中で、表現全体の幅の広さとして、幼児が意識的に表現をする前提として、自分の意思をさまざまな方法で表現するところから捉えられて、少しずつ内面的なイメージを、身体を使って表現することを楽しむ。その表現も自分の思っていることをより表現できるように深めていくプロセスを重視するように感じる。幼児の本能のままの表現から、内面に蓄積されたイメージを考えて身体的表現を大切にすることが、幼児の豊かな感性に繋がり、豊かな表現に繋がるものと考えられる。

Ⅲ. 幼児の身体的表現を育む保育者の役割について

上記Ⅱにおいては、領域「表現」のねらい・内容・内容の取扱い、および「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「豊かな感性と表現」から、身体的表現に関するものを抽出し考察してきた。そこでは、幼児が心を動かす中で生まれてきた表現、内面に蓄積されたイメージから生まれてくる表現を大切にしたい身体的表現が大切であることが浮かび上がった。

そこで、次に、そのような身体的表現を育むために、どのように保育者が、幼児の表現を捉え、関わっていくことが求められているかといった保育者の役割の視点から論考を進める。

1.「幼稚園教育要領解説」(平成30年)から読み取れる保育者の役割

領域「表現」の内容(4)の解説文³⁰⁾で「教師は、表現の手段が分化した専門的な分野の枠にこだわらず、このような幼児の素朴な表現を大切にしたい。幼児が何に心を動かし、何を表そうとしているのかを受け止めながら、幼児が表現する喜びを十分に味わえるようにすることが大切である。」と記載されている。

また内容(8)の解説文³¹⁾では「幼児が安心して自分なりのイメージを表現できるように、教師は、一人一人の発想や素朴な表現を共感をもって受け止めることが大切である。共感する教師や他の幼児がそばにいることにより、幼児は安心し、その幼児自身の動きや言葉で表現することを楽しむようになる。」と記載されている。

内容の取扱い(3)の解説文³²⁾では「教師は、幼児がお互いの活動を見たり聞いたりして相手の表現を感じ

表3 身体的表現を育む保育者の役割

①身体的表現が芽生えてきているとき	②身体的表現をしているとき	③身体的表現をより豊かに育むために
<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の素朴な表現を大切にす ・ 幼児が何に心を動かしているかを受け止める ・ 幼児が何を表そうとしているのかを捉え、一人一人の発想や素朴な表現を共感をもって受け止める 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児が安心して自分なりのイメージを表現できるようにする ・ 幼児が表現する喜びを十分に味わえるようにする ・ 幼児の心に寄り添いながら適切な援助をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児がお互いの活動を見たり聞いたりして相手の表現を感じ取れるように、場や物の配置に配慮する ・ 教師も一緒にやってみたりする ・ 相互に響き合う環境を工夫する

取れるように、場や物の配置に配慮したり、教師も一緒にやってみたりして、相互に響き合う環境を工夫することが大切である。」また「教師は、幼児が表現する過程を楽しみ、それを重ねていき、その幼児なりの自己表現が豊かになっていくように、幼児の心に寄り添いながら適切な援助をすることが大切である。」と記載されている。

前述したように、平成20年及び29年の改訂によって、領域「表現」の内容の取扱い(3)では、幼児が「表現する過程を大切にす自己表現を楽しめるように工夫する」という部分が付け加えられている。そのため、上記の内容(4)(8)及び内容の取扱い(3)の解説文において、幼児自身が表現する過程についての記述がみられる。表現する過程は、表現の始まり(芽生え)、楽しみながら表現をしている最中という過程が含まれるが、身体的表現を育む保育者の役割として、表3に分けることが出来ると考え、この表3の①、②、③の過程を意識すると良いと考えられる。

2. 保育内容「表現」の教科書類から読み取れる保育者の役割

前項1の最後で示したように「幼稚園教育要領解説」では、「身体的表現が芽生えてきているときに保育者が共感したり受け止めたりすることの大切さ」「身体的表現をしているときに幼児なりのイメージを大切にしながら表現する喜びを味わえるようにすること」「身体的表現をより豊かにするためには、相互に響きあう環境を工夫することといったこと」が保育者の役割として示されていた。

それでは、保育者養成校で使用される領域「表現」の教科書類テキストでは身体的表現を育む保育者の役割がどのように示されているのであろうか。2010年以降に出版されている領域「表現」に関する教科書類テキストを、表4のように20冊検索した。その中から、平成29年告示された「幼稚園教育要領」に合わせて執筆されていると思われる2018年以降に出版している教科書類テキストの中から、ここでは5冊を取り上げて検討する。

その5冊の選定には、主要出版社であること、編者として主要な方が書かれている各教科書類テキストの中で、身体的表現について書かれている部分の執筆者を確認して、その上で執筆者が重ならないこと、多様な点から捉えようとして取り上げると4名の身体的表現の解説を抽出することが出来た。結果的には4名がそれぞれ違う切り口から身体的表現を論じているが、結局は同様な論点で説明されていることが分かった。

直井(2018)は、「毎日の保育の中で幼児は保育者と一緒に様々な身体表現に取り組む。保育者自身が好奇心や探究心をおおいに起動させて、幼児と一緒に遊びこんでいくことだ。幼児が表現する過程を大切にしながら、保育者自身が表現することを楽しむモデルとなって幼児の感性を育てていくことが大切である。」³³⁾と記載している。

宮里(2019)は、「保育者は表現技術が高いことは良いことだが、それと同じぐらいに大切なこととして、表現の楽しさを知っていること、表現に対して興味をもち何でもやってみようとする姿勢を持っていることである。楽しさを感じるようになるためには、自分はなかなか良いと思うことである。表現の根本にあるのは自己肯定感である。表現する幼児のそばに居る保育者が、「自分は表現が好き!」「自分はなかなかいい!」とすることが、豊かな表現に影響を与えることになる。」と記載している³⁴⁾。

高野(2019)は、「乳幼児期はイメージした想像世界と現実世界とを行き来しながら、好きなものになりきって表現して遊ぶことが出来る。幼児たちが感じたことを受け止めて、それを広げる援助をしていくことが保育者として重要です。」³⁵⁾幼児なりにイメージして表現し、一人一人違った表現でもかまわない、また友達のままをしてもかまわない、さらに他者から「うさぎ」にみえなくてもかまわない。自分が思ったとおりに表現することを大切に、保育者も幼児と一緒に表現を楽しむこと。また、年長児では表現を見合う時間を設けると、友達の動きをお互いに見ることによってより豊かな動きとイメージが広がっていく。友達同士と一緒に考え、工夫する時

表4 2008年以降の保育内容「表現」の教科書類テキスト

(本論考で使用した教科書類テキストには、*を付している)

	題名	監修 編集	出版年	出版社
1*	保育内容「表現」 アクトベート保育学 11	岡本祐子・花原幹夫・汐見稔幸	2020	ミネルヴァ書房
2*	保育内容「表現」 新しい保育講座 11	小林紀子・砂上史子・刑部育子	2019	ミネルヴァ書房
3	保育内容「表現」 最新保育講座 11	平田智久・小林紀子・砂上史子	2010	ミネルヴァ書房
4	音楽表現 (新・保育内容シリーズ5)	谷田貝公昭・三森桂子	2010	一藝社
5	音楽表現 (実践 保育内容シリーズ5)	谷田貝公昭監修 三森桂子・小嶋エマ	2014	一藝社
6	音楽表現 コンパクト判保育内容シリーズ5	谷田貝公昭監修 渡辺厚美・岡崎裕美	2018	一藝社
7	音楽表現 新版・実践保育内容シリーズ5	谷田貝公昭監修 三森桂子・小嶋エマ	2018	一藝社
8	演習 保育内容「表現」	岡 健・金澤妙子	2019	健帛社
9	コンパス 保育内容 表現	島田由紀子・駒久美子	2019	健帛社
10	シートブック 保育内容 表現 第3版	入江礼子・榎沢良彦	2018	健帛社
11	コンパス 音楽表現	駒久美子・味府美香	2020	健帛社
12	実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現	石井玲子	2018	教育情報出版
13	表現者を育てるための保育内容「音楽表現」 -音遊びから音楽表現へ-	石井玲子	2020	教育情報出版
14*	保育内容「表現」-体で感じる・表す・伝える- 改訂版第2版	池田裕恵・猪崎弥生	2019	杏林書院
15	表現指導法-感性を育て、表現の世界を拓く	上野奈初美	2020	萌文書林
16*	新訂事例で学ぶ保育内容 領域 表現	無藤 隆監修 浜口順子	2018	萌文書林
17*	保育内容 表現 乳幼児教育・保育シリーズ 教職課程コアカリキュラム モデルカリキュラム 準拠	鈴木みゆき・吉永早苗・ 志民一成・島田由紀子	2018	光生館
18	保育内容 表現 [第2版]	中川香子・清原知二	2018	(株) みらい
19	子どもの姿からはじめる領域・表現	秋田喜代美・三宅茂夫監修 浅野卓司	2021	(株) みらい
20	実践 心ふれあう 子どもと表現	松家まさこ・鈴木範之	2021	(株) みらい

間も設けることで、幼児たちは容易に身体表現に取り組める」³⁶⁾と記載している。

猪崎(2019)は、「保育者は幼児を上手に受け止めなければならない。それには幼児がそこまで至ったプロセスを知っておかなければならない。ポイントとして始まり・幼児が工夫したり考え込んだりして動きが止まったところなどをつかんでおければ、結果だけで幼児を判断することは避けられる。幼児の身体表現において、小さな動きからダイナミックに大きく動くようになる変容

を注目し、保育者は幼児の表現したい心を大切に、幼児の育ちを見守る態度で幼児に接し、幼児が身体表現を通して自らの心と体で満足感を味わえるようにすべきである。幼児の身体表現を見るときには身体の動きだけではなく顔の表情や姿勢に注意し、幼児が表現したくなるような仕掛けや環境を設定することも忘れてはならない。幼児の反応を待ち、幼児が自分の世界を楽しめるような雰囲気作りが重要である。また、肯定的な言葉かけをすることで幼児は自信を持ち、自分を他者に見せたい

表5 教科書類テキストにおける身体的表現を育む保育者の役割

① 身体的表現が芽生えてきているとき	② 身体的表現をしているとき	③ 身体的表現をより豊かに育むために
<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の幼児が感じたことや考えたことを受け止める。 ・幼児の表現したい心を大切にする。 ・身体的表現に至るプロセスを知ることが大切にする。 ・発想や素朴な表現を共感を持って受け止めることを大切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が思ったとおりに表現することを大切にする。 ・幼児のからだ全体から発するメッセージを適切に受け止める。 ・幼児の感性を受け止める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者自身が表現することを楽しむモデルとなって幼児の感性を育てていくことが大切である。 ・幼児が表現したくなるような仕掛けや環境を設定すること。 ・肯定的な言葉かけをすること。 ・保育者自身が表現を楽しむ。 ・相互に響き合う環境を工夫する。

という気持ちが強まる。

幼児の感性を受け止めるには、保育者は自分が持ち合わせている感受性だけに頼ることなく、それを高め、幼児を理解する力にしなければならない。幼児は100人いれば100通りの動き方をするものなので、保育者は想定外のことでも慌てずに対処することが求められる。幼児のからだ全体から発するメッセージを適切に受け止める力である³⁷⁾。身体表現はからだが道具である。しかし、単なる道具ではない。からだは心を含む。からだにある心がからだを動かしていることを認識する必要がある。幼児に身体表現を指導するには、保育者が表現できる身体になる必要がある。」³⁸⁾と記載している。

直井(2020)は、「保育者は一人一人の幼児が感じたことや考えたことを安心して自分なりのイメージを表現できるように、その発想や素朴な表現を共感を持って受け止めることが大切です。そして、その表現は何度も試行錯誤を繰り返し行われていくので、そのための環境や素材を保育者は用意していきます。」³⁹⁾と記載している。

これらのことから、身体的表現を育む保育者の役割として表5の事項を意識するとよいと考えられる。この分類は、Ⅲ1と同様で、「幼稚園教育要領」の平成20年、29年の領域「表現」の「内容の取扱い」の変更になった部分と関連して、幼児の表現する過程を大切にするところがあるので、表5のように分けることが出来ると思われる。

3. 幼児の身体的表現を育む保育者の役割についての考察

平成30年「幼稚園教育要領」及び教員養成校で使用される保育内容「表現」の教科書類テキストにおいて、保育者がどのように幼児の身体的表現を捉えていくとよいかという視点で検討し、抽出した結果、平成30年「幼稚園教育要領」と保育内容「表現」の教科書類テキストにおいても、「幼稚園教育要領」を元に、同じような視点で伝えている。

幼児の中のイメージを大切にし、自由に表現できる環境を作ることが必要であり、そして一人一人の表現を認め受け入れ、その一人一人の表現のプロセスを大切にし、保育者は結果だけを見て評価をしないことが、幼児の身体的表現を捉える視点であると捉えている。

幼児がどのように表現をし始めたのか、その後どのように成長していったのか、保育者としてプロセスをしっかり見つけ、どのような言葉がけをしたらよいか、どのような環境を整えたら良いかを次に繋がる行動が必要である。

一番大切なことは、幼児の身体的表現を認めるだけでなく、保育者自身が楽しく自ら身体的表現が出来ることである。保育者自身が幼児のモデルとなれるように、楽しく表現をすることによって、一緒に幼児も自由に表現し、幼児も表現する楽しさを味わうようになる。宮里(2019)⁴⁰⁾で指摘されているように、保育者が表現を楽しい・表現が好きと思っていることが幼児の豊かな表現に影響を与えるなど、教科書類テキストで指摘されていることは、中根(2016)でも同様に保育者の身体的表現は幼児に影響を及ぼすと指摘されている。今回取り上げた5冊のテキスト全てにおいても、保育者が幼児の表現を受け入れることが大切・保育者が幼児の一人一人の表現を認める・保育者自身の表現が大切という観点での記載があった。⁴¹⁾それだけ保育者の幼児の身体的表現の捉え方や保育者の豊かな身体的表現が重要であると考えられる。

IV まとめ

平成元年から平成30年までの「幼稚園教育要領」の変遷において、領域「表現」の中で、身体的表現における位置づけは、基本的には変わっていないが、表現する過程(プロセス)を重視するようになってきた。その過程において「身体的表現が芽生えてきているとき」「身体的表現をしているとき」には、内面に蓄積されたイ

メージを身体で表現することを大切にすることが必要であり、「身体的表現をより豊かに育む」ためには、教師も一緒にやってみたり、幼児同士がお互いの表現を感じられるようにすることが、幼児の豊かな感性に繋がり、豊かな表現に繋がること示されていることがわかった。

そして、その理解を深めるために、養成校などで使用される保育内容「表現」の教科書類テキスト（5冊）の検討を行った結果として、次のことが明らかになった。

幼児が感じたことや考えたことを受け止め、表現したい心を大切にすること、また幼児の身体的表現を共感することが、表現をしようとする過程の始まりであり、その時期を大切にすることによって、幼児は受け止めて貰える安心感から、思った通りに身体的表現をするようになる。その幼児が思った通りに表現することを大切に、幼児の身体的表現からの幼児の発するメッセージや、感性を受け止めることが重要である。そして、その幼児の感性を育てるには、保育者自身が表現することを楽しむモデルとなり、表現したくなるような環境を整えることが大切。また、保育者が幼児の表現を肯定的に捉えることが必要である。

その中で、幼児への働きかけだけでなく、一番大切なことは保育者自身が楽しく自ら身体的表現が出来ることであるとなっている。保育者の表現は幼児の身体的表現に影響を及ぼすと記載されていた。

このように教科書類テキストでは、「幼稚園教育要領」を元に、より具体的に学生が幼児教育現場に出るまでに、イメージをしやすいか記載されていた。

今後の課題としては、筆者は養成校の学生達が「幼稚園教育要領」や教科書類テキストに記載されているように、自ら表現を楽しみ、豊かな表現力を身につけることが出来る働きかけを行うと共に、幼児の自由な身体的表現を受け入れる気持ちを持つことを伝えていくことが必要である。また、保育現場の保育者達にも、「幼稚園教育要領」を再認識することの必要性を伝え、保育者として豊かな身体的表現力を身につけるように促し、幼児の一人一人の身体的表現を受け入れ、肯定的に捉えていくことの大切さを伝えていく必要があるのと共に、保育者が今現在どのように幼児の身体的表現を捉えているかを調査研究して行きたい。

注

1) ここでいうリトミックは、ダルクローズの源流とする概念の元で捉えているものをさしているが、しかしながら保育の現場ではリトミックという呼称の元で、音楽に合わせて体を動かすような音感教育をされているところもある。それを含

めてリトミックという言葉を使っている。

引用文献

- 1) 山内信子 (2017). 保育内容「表現」の指導に関する研究 - 幼稚園教育要領等の変遷に基づいて - 聖和短期大学紀要, 3, 75-83.
- 2) 倉原弘子 (2020). 幼稚園教育要領における教育内容の変遷に関する一考察：領域「表現」を中心として 中村学園大学発達支援センター研究紀要, 11, 61-66.
- 3) 文部省 (1989). 幼稚園教育要領
- 4) 文部省 (1998). 幼稚園教育要領
- 5) 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領
- 6) 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領
- 7) 文部省 (1989). 幼稚園教育要領
- 8) 文部省 (1998). 幼稚園教育要領
- 9) 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領
- 10) 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領
- 11) 文部省 (1989). 幼稚園教育要領
- 12) 文部省 (1998). 幼稚園教育要領
- 13) 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領
- 14) 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領
- 15) 文部省 (1989). 幼稚園教育要領
- 16) 文部省 (1998). 幼稚園教育要領
- 17) 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領
- 18) 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領
- 19) 文部省 (1989). 幼稚園教育要領
- 20) 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領
- 21) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. pp.233-234.
- 22) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. p.235.
- 23) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. p.236.
- 24) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. p.238.
- 25) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. pp.242-243.
- 26) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. p.244.
- 27) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. p.245.
- 28) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. pp.246-247.
- 29) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. pp.72-73.
- 30) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. p.238.
- 31) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. pp.242-243.
- 32) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. pp.246-247.
- 33) 直井玲子 (2018). 第4章領域「表現」の「ねらい及び内容」をふまえて保育を構想する 鈴木みゆき・吉永早苗・志民一成・島田由紀子編 保育内容表現 光生館 p.91.
- 34) 宮里暁美 (2019). 第6章保育者が支える表現 浜口順子編 事例で学び保育内容領域 表現 萌文書林 pp.141-142.
- 35) 高野牧子 (2019). 第3章身体的の表現と感性 小林紀子・砂上史子・刑部育子編 保育内容「表現」 ミネルヴァ書房 p.39.
- 36) 高野牧子 (2019). p.47.
- 37) 猪崎弥生 (2019). 理論編4 保育者のからだと表現 保育内容「表現」-からだで感じる・表す・伝える- 杏林書院 pp.36-37.
- 38) 猪崎弥生 (2019). p.40.

- 39) 直井玲子 (2020). 第3章身体的な感性を育む表現 岡本
 拡子・花原幹夫・汐見稔幸編 保育内容「表現」 ミネル
 ヴァ書房 p.47.
- 40) 宮里暁美 (2019). p.142.
- 41) 中根佳江 (2016). 保育者の表現力が子どもの表現力にも

たらず影響—リトミックの模倣活動を通して 大阪総合保
 育大学紀要, 10, pp.127-138.

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

The Role of Childcare Teachers in Nurturing Children's Physical Expression : Analysis of the Area of “*Expression*” in “*Course of Study for Kindergarten*”

Yoshie Nakane Koji Takigawa

Osaka University of Comprehensive Children Education

Osaka University of Comprehensive Children Education

In this study, we attempted to clarify the role of caregivers in nurturing children's physical expression by discussing physical expression in kindergartens in relation to the aims and contents of “*Course of Study for Kindergarten*” and the area of “*Expression*” described there. As a result, it was found that children's physical expression involves expressing their internal images of what they feel and think through various experiences, and that it is important for the caregivers to accept children's physical expression in order to nurture it. In order to nurture such physical expression, it is important for the caregivers to accept children's physical expression, and it has become clear that children's physical expression is affected by the way caregivers perceive them.

“*Course of Study for Kindergarten*” does not directly use the words “physical expression” or “body expression” in the area of “*Expression*”. We believe that the phrases “expression in one's own way” and “various expressions” include children's own ways of expression and various ways of expression in physical expression (e.g., rhythmic, dance, and gestural expression). We believe that cherishing children's instinctive physical expression and perceiving the internal images that the children have accumulated will lead to nurturing rich sensitivity and expression in children.

In addition, when the caregivers accept children's physical expression, the children will enjoy it and try to express themselves. It became clear that children's physical expression is affected by the way caregivers perceive them.

Key words : childcare teacher, physical expression, young children, kindergarten education guidelines, area “expression”

